第３回夢洲新産業・都市創造セミナー
『いのち輝く未来社会デザインの共創
～２０２５大阪・関西万博に向けて』

開催報告

一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構　事務局作成

第３回夢洲新産業・都市創造セミナー〈オンライン開催〉
『いのち輝く未来社会デザインの共創～２０２５大阪・関西万博に向けて』
開催報告

第３回夢洲新産業・都市創造セミナー「いのち輝く未来社会デザインの共創～２０２５大阪・関西万博に向けて」を、2020 年 11 月 26 日(木)オンラインにて、一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構主催で開催いたしました。経済界、学界、医学界、経済団体、行政機関等から沢山の方々にご参加いただき、盛大に開催できましたことを厚く御礼申し上げます。

第１部　講演

講演テーマ「大阪・関西万博の最新動向～世の中を変える動きを創り出す新しい万博に！」
森 清氏
公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会 副事務総長(理事)

本日はこのような機会を与えていただき誠に有難うございます。第１部では最新の動向をお伝えしたいと思っておりますので、宜しくお願い致します。
まず、大阪・関西万博の概要ですが、テーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」、コンセプトは「People’s living lab(未来社会の実験場)」です。この「未来社会のデザイン」と「未来社会の実験場」というのはほぼ同じ意味で、未来社会の実験を通じて、いのち輝くを現出するというのが今回の万博テーマ・コンセプトだと思っています。
会場は海に囲まれている夢洲で、開催期間は 4 月から 10 月です。こういう 6 カ月間のイベントは後になればなるほど混むので、まだ混まない間、また、熱中症にならない間に、ぜひ全国から修学旅行等で小中高生に来ていただき、そういう方々がご家族を連れてくることになればと思っています。また、ぜひアジアの若い方々も 4 月、5 月、6 月に大勢来ていただきたい。想定入場者数は約 2800 万人で、うち約 350 万人がインバウンドです。昨年は 350 万人より沢山の方が来られるのではないかという声を多くもらいました。現在コロナ禍でインバウンドの人はほとんどいらっしゃらない状態ですが、またぜひ 2025 年には 350 万人来ていただきたいと真剣に思っています。
公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会の会長は一般社団法人日本経済団体連合会 会長 中西 宏明氏、事務総長は前独立行政法人日本貿易振興機構 理事長 石毛 博行氏です。副会長は関西・日本の財界の方々、大阪府知事、大阪市長、そして関西広域連合長です。また、アートコーポレーション株式会社 名誉会長寺田 千代乃氏、株式会社ビジョンケア 代表取締役社長 高橋 政代氏、華道家元 池坊 専好氏にも理事になってもらっています。そして副事務総長として私はじめ 3 名が従事しています。
昨年 12 月に閣議決定で「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとして、新たな技術やシステムを実証する「未来社会の実験場」としての国際博覧会を実現するという文言がしっかり明記されました。そして 7 月 17 日に閣議決定された成長戦略フォローアップでは、「未来社会の実験場」のコンセプトで民間企業等から募集したプロジェクトの実現に向けて取組んでいくということが明記されました。統合イノベーション戦略 2020 では、「People’s Living Lab（未来社会の実験場）と位置付け、研究開発の成果を実証する絶好の機会と捉えて、我が国の研究開発の取組や新型コロナウイルス感染症克服後の社会の在り方を積極的に発信していく」と明記されました。また、大阪・関西万博における日本のプレゼンス向上のため、多言語翻訳技術の飛躍的な発展が期待されているということも記載されています。

また、菅内閣総理大臣は10月26日に「この万博はコロナ禍を乗り越えた先の新たな時代に向けた国家プロジェクトであると認識しています。万博のテーマであるいのち輝く未来社会のデザインのもとに健康、医療をはじめカーボンニュートラルやデジタル化といった政権の方向性も体現し、日本の魅力を世界に発信する絶好の好機とすべく政府一丸となって取り組んでいきたい」とおっしゃられています。菅内閣では万博担当大臣が発足し井上大臣が就任されましたが、井上大臣も国会答弁で「万博特措法に基づく基本方針の策定に取り組む」とおっしゃられました。基本方針は閣議決定されるものですが、愛知万博のときにはなかったものです。東京オリンピックのときに基本方針ができ、それを踏襲したわけですが、今後基本方針の策定を政府としてやっていこうとおっしゃっています。また、「国際機関の登録承認後、直ちに各国への参加招請活動を開始する」、「最先端技術やデジタル化も組み合わせ、新しい形の万博をつくり上げます」とおっしゃられました。協会としても、万博の実行部隊として真剣に取組まなければと思っている次第です。
そして、万博会場の夢洲は、海に囲まれているということに加え、水都大阪の特長として淀川はじめ色々な水路が都心のほうへ入っています。これは空飛ぶクルマにとって非常に良い環境です。空飛ぶものは建物の上より水の上のほうがまだ安全ということで、空飛ぶクルマの実証をするのは大阪だと強く思っています。2025年に空飛ぶクルマが上手くいけばと思いますが、人間が乗れるのか、アバターが乗るのかもしれませんが、一つの目玉にできる絶好の土地が大阪だと思っています。
万博会場は155haです。東京ディズニーランドやディズニーシー、USJの約3倍の大きさがあるということで、沢山の人が来られると思います。中央線が延伸する新駅があるので、鉄道から来られる人はこの新駅のところに大量に来られと思うので、それに耐え得る会場設計をしなければということになります。また、シャトルバスやタクシーで来られる人は、メガソーラーの南の部分の所にできる大きなターミナルのほうから入っていただく。つまり、駅から来られる人と車で来られる人とは別々の入口から入っていただこうと思っています。9時から始まるとしますと、8時から10時ぐらいの混雑をどう解決していくかを大阪府市と協っています。
そして、会場配置計画ですが、155ha をパビリオンワールド、ウォーターワールド、グリーンワールドという3つのワールドに分けたいと思っています。ただ、この会場計画は誘致の段階のもので、会場デザインプロデューサーである藤本 壮介氏がご自身のお考えを注入中で、それを今議論しているというのが現状です。従って、計画図は今後進展変化を遂げていくと考えていただければと思っています。
次に、「いのち輝く未来社会のデザイン」ということで、2025年の万博は「いのち」の誕生から38億年ということで、人間も含む万物のいのちの祭典と思っています。最近のコロナ禍を踏まえ、人類80億人のほとんどの人が1つのこのコロナという病のことを一緒になって心配しているというのは、人類史上で初めてのことと思っています。この「いのち輝く未来社会のデザイン」というのは、万物のいのちであるとともに、人類のいのちも、この1年間でクローズアップされてきたということで、この「いのち輝く」という言葉をどのように現出するかという使命がますます万博に対する期待とともに重くなっていると感じている次第です。
次に、2025年はSDGsの目標年である2030年の5年前になります。SDGsという概念ができたのは2015年で、それまではMDGs(ミレニアム・ディベロップメント・ゴールズ)という概念でした。では、そのSDGｓの中のサステナビリティという概念がいつ頃できたかというと、2012 年にリオ国際開発サミット＋20 年という会議が開かれたときに、国際機関の間である程度確立しました。今回も2030年の5年前である2025年というのは、サステナビリティという概念を継続させることがいいのか、もしくは何か新たな概念を模索した方がいいのか、そういうことを議論するのに丁度よい時期です。サステナビリティという概念自体、今どんどん広がっていますが、今のSDGsの概念の中には、サイバー空間の倫理問題やLGBTなどのように、あまり検討されていない概念もあります。したがって、2025年の万博は、SDGs達成に向けた取組みを加速させる絶好の好機であると同時に、＋beyondを考える絶好の機会ではないかと思っています。万博前から開催期間中も技術の展示・発表に加え、哲学者の方などに世界中から沢山来ていただき議論をした後、開催期間の最後のほうで、できれば SDGs＋

beyond 宣言みたいなものを発出できないか、それがレガシーとして残るんじゃないかということで、シニアアドバイザーやプロデューサーの方々と議論をしているというのが現状です。そのために、我々は今から 2025 年に向けて共創のための活動を推し進めたいと思っています。今はまだ大阪だけですが、小中学校で SDGs と万博の関係についての 10 時間分の教科書を作りました。大阪の小中学校で手を挙げてくださった方に今まさにやっていただいており、上手くいったら、関西、そして日本全体にも広げていきたいと思っています。それと一緒に大学、自治体、NPO、個人、企業等による組織を超えた共創の促進というのを“Team EXPO 2025”と名付けて立ち上げたところです。参加型万博ということで、大阪、関西、日本で万博にいろいろな人々を巻き込んでいく、万博協会が主体というよりも皆様が主体になるのが一番成功の道だと思っています。

この“Team EXPO 2025”に参加していただくために 2 つの方策を作りました。1 つ目は共創パートナーということで、自治体、NGO、NPO、メディア等の方々に SDGs をされる方々を支援する法人、団体として連携をお願いしています。2 つ目は共創チャレンジということで、SDGs や Society 5.0 の実現に向けた活動や文化・芸術に関する創造的な活動等、実際にアクションを起こされるところを認定させていただき、つながりを広めていこうと思っています。これは 10 月の末までに第 1 弾を発表させていただきましたが、今合計 100 を超えるところと相談をさせていただいており、その輪をどんどん広げていきたいと思っていますのでご興味ある方はぜひ宜しくお願い致します。
そして、もう 1 つの柱として、昨年から「未来社会の実験場（People’s Living Lab)」の意見募集をしており、現在 1000 件以上集まったわけですけども、会場設計、環境・エネルギー、移動・モビリティ、情報通信・データ等のアイデアをいただいています。また、会場内エンターテインメントも 300 件近く応募をいただいており、半分ぐらいはデジタルを活用したものですが、半分ぐらいは、「いのち輝く」というのを真剣に議論しよう等、アナログ的な意見も多かったことをお話ししておきたいと思っています。5 月には PLL 促進会議の中間報告を公表致しました。提案件数 1016 件ですけれども、新規提案も随時受付中ですので宜しくお願い致します。建設は 2022 年後半から本格的になっていきますので会場建設に関わるアイデアはできればそれまでにいただかないといけないわけですが、アプリケーション等すぐにインストールできるようなアイデアは直前まで大丈夫ですので、ぜひ新規提案がありましたらお願い致します。
そして、空飛ぶクルマを万博会場内でやりたいと思っていますが、上手くいきましたら万博会場と外をつなぐということも非常に大事で、大阪府市がそのドライビングフォースとして協議会を作ってくださっており、今後も大阪府市と連携を取りながら空飛ぶクルマの実装に向けた取組みを進めていきたいと思っています。ただ、空飛ぶクルマだけではなく、菅総理の発言にもありましたようにエネルギーやデジタルも議論をしていますので、ぜひ新規提案ありましたらいただければ有難いと思っています。
次に、プロデューサーですが、7 月にテーマ事業プロデューサー、会場運営プロデューサー、会場デザインプロデューサーを決めました。行催事プロデューサーは今後選定予定です。行催事となりますと開会式、閉会式、また開会中例えば 150 カ国参加してくださるとすると土日除いてほとんど毎日どこかの国のナショナルデーになろうかと思います。ナショナルデーは恐らく 10 時頃から 15 時頃まで万博会場内に国家元首みたいな方も来ていただくようにしたいと思っており、その後に大阪市内や岸和田、神戸、京都等に繰り出していただき、経済的な取組みが関西一円に巡るようにしていきたいと思っています。バーチャル会場デザインについてはまだ検討委員会が発足できてない状況で、今鋭意議論中です。会場デザインプロデューサーは藤本 壮介氏、会場運営プロデューサーは石川 勝氏、テーマ事業プロデューサーは 8 名の方になっていただいています。万博会場にはパビリオンが 100 程度できると思い

ます。各国の館と企業グループの館だけでなく、今回は新しい試みとして博覧会協会がテーマを決めて各テーマのプロデューサーを任命し、関心を持ってくださる企業に協賛になってもらうということで、テーマ事業プロデューサーを選定し、どのようにして行こうかと、今議論していただいています。
バーチャル会場のイメージは４つあります。まず、リモート参加です。これは、遠隔地からも万博会場内に設置したカメラや音響施設を利用して、今何が起こっているかを覗いてもらうみたいな形で参加していただく、もしくはアバターみたいな形でカメラを色々切り替えて、できるだけリアルに近い体験をしてもらう等です。2 つ目は夢洲会場のデジタル展示です。これは、バーチャル渋谷のような取り組みと同じ形でデジタル上に夢洲会場をそっくりそのまま移管して、そこに入っていただくという形です。3 つ目は夢洲会場における融合展示です。例えばパビリオンで VR や AR の眼鏡を配るとかいう形で、この夢洲の会場に入ってくださった方がバーチャル的な体験をされるということです。そして 4 つ目はバーチャル会場です。70 年万博におけるエキスポランドのような夢洲会場とは独立したもので、万博会場で待っている間や万博会場以外でも、バーチャル会場に入っていただき、万博に関連した体験をしていただくというものになります。これはまだ検討が十分進められておらず、協会内の専任チームが色々な方々のご意見をいただいているところです。
次に、シニアアドバイザーです。リストの上から、安藤 忠雄氏、池坊 専好氏、大﨑 洋氏、桂 文枝氏、河瀬 直美氏、ロバートキャンベル氏、そして、コシノジュンコ氏等、錚々たる方々に入っていただきご意見を賜っているわけですけども、いわば総合プロデューサー的なご意見と具体的なご意見をもらっていきたいと思っています。
そして、アンバサダーは 2020 年 2 月に発表いたしまして、まだコロナ禍で十分にご活躍していただいていませんが、誘致のときからダウンタウンや山中 伸弥氏にはご活躍いただいています。また、松本 幸四郎氏はロゴマークのときに幕を引いていただく役をしていただき、宝塚歌劇団は先日 30 周年花博の会に出ていただきました。今後、どんどん皆様に万博の応援をしていただこうと考えています。
そして、ロゴマークですけれども、8 月に出たときは気持ち悪いと言われたんですが、今は可愛いやないかと言われ始めています。大阪はマスメディアも 16 時から 18 時まで自分のニュース枠を持っていたり、新聞各紙も大阪の枠取りは結構強かったりするので、大阪では万博のことが沢山宣伝されていますが、東京の人は知らないという状態に苦しんでたわけですけれども、このロゴマークは東京発のワイドショーやクイズ番組でも出てくれて、ロゴマークのデザインの力を思い知ったわけです。全国に 2025 年に大阪で万博があるらしいということは分かってもらえたのかなと思っていますが、まだまだこれから万博が日本全体で浸透していくようにしなければと思っています。今は静止のロゴですが、立体的にしたらどうか、動き出したらどうか等のご意見をいただいていまして、プロの方々を含めて議論をしていますので、乞うご期待いただければと思っています。色々なところで使っていただいて本当に皆様に感謝しております。ぜひ大阪・関西だけでなく東京等にも進出していきたいと思っています。また、一般の方が使用できるロゴマークもございますのでぜひ申請をしていただければと思います。「EXPO 2025」の横に「いっしょに、いこな！　大阪・関西万博」や「MEET ME AT EXPO 2025」等のメッセージを入れて使っていただけることになっていますので宜しくお願い致します。
そして、感染症対策ですけれども、大阪府のコロナウイルス対策の座長をしていらっしゃる朝野 和典氏に我々も座長になっていただき、7 月より 2 回検討会議を開いており、今後も定期的に色々な観点からお知恵をいただきたいと思っています。2025 年には今のコロナウイルスは終息しているとおっしゃってくださる方が多いですけれども、また新たなウイルスが来ているかもしれませんし、人の感受性や考え方も変わっているかもしれません。また、食中毒の問題もあります。まず我々スタッフが衛生的でなくてはいけない。その次に、来場者の方にどのように対応していただくか。今後も定期的に専門家の方々のご知見を伺って、感染症対策は大丈夫だと感じていただきたいと思っています。
当面のスケジュールですが、7 月にプロデューサーが選定されました。プロデューサーの骨格になる方々を選定させていただきましたので、今後は行催事プロデューサーやプロデューサーの下にもクリエーター等色々な方々が出てこられると思います。8 月にはロゴマークを

決定致しました。そして9月に博覧会推進本部が内閣官房に設置され、井上大臣にご就任いただいたということです。そして12月のBIE総会において、半年遅れでいよいよ登録申請書の承認をしていただこうと思っています。承認が得られれば、晴れて公式に各国に対する参加招請活動ができるということです。そして、できれば、基本計画をプロデューサーのご意見を十分に踏まえた上で年内に策定公表したいと思っています。建設会社はじめ、博覧会に関わろうと思ってくださる方々の多くは、なるべく早く基本計画が策定できるのが望ましいと思ってらっしゃるので、そういうご意見を踏まえて、なるべく早く出したいと思っています。また、政府は政府で基本方針という閣議決定をなるべく早く作りたいと動いてくださっています。そして、ドバイ博が2021年10月から3月末です。普通博覧会は4月や5月から始まるわけですが、ドバイは暑いので、暑い時期やラマダンを避けて10月からなので、終わると2022年の3月末です。2025年までは3年しかないので、ドバイ博を待たずに各国にドバイ博の次の出展を同時並行で考えてくださいというお願いをしなければいけないわけです。ぜひご協力を賜って皆で一緒に世界各国から万博に参加してという動きにご協力いただきたいと思っています。宜しくお願い致します。
基本計画策定の準備状況ですが、11章立てを考えていまして、基本的な構成は既に発表しています登録申請書と同じですが、主に、第6章 運営計画、第7章 輸送計画、第9章 情報通信計画、11 章 事業推進計画のリスク管理等が、あまり登録申請書では書かれていなかったところになります。できる限り読みやすくするためページ数を増やさないように検討しています。
大阪・関西万博への参画ですが、一番大きいのは会場内に企業名を冠したパビリオンを設置していただくことです。また、テーマ事業の協賛というのは、先程ご紹介した8人のプロデューサーのテーマに協賛していただけないかというものになります。People’s Living Lab参加というのは、博覧会会場で色々な先端技術の実証を見せていただきたいということです。営業参加というのは、レストランや土産物・弁当販売等です。これについては恐らく2022年の後半から 2023 年ぐらいに本格的な議論をすると思いますが、ある程度のことは今回の基本計画でも申し上げたいと思っています。催事協賛参加というのは、まだ催事プロデューサーが決まっていないのですが、そもそも、最近の万博においては、パビリオンはもちろん大事ですが、催事も半分、場合によってはそれ以上の意味を持っていると思います。我々は大催事場や小催事場、屋外の野外スタジアムみたいなもの、少人数が集まれる催事施設を設けようと思っています。また、メッセ的なものも造れないか等、色々なやり方を議論させていただきたいと思っています。施設提供・貸与参加ですが、会社の製品を活用させていただきたいと思っています。また、広報参加や運営協賛参加等、色々皆様と議論をさせていただきたいと思いますし、関心のある方はぜひ協会にコンタクトしていただければと思っています。愛知万博のときには、パビリオン出展やテーマ事業協賛をいただき、燃料電池バスやロボットプロジェクト等の先端技術の実証や営業出展・物品の提供もあったわけでして、ぜひ愛知博を超えるご協力を賜りたいと思っています。
会場整備は今から設計をどんどん進めていって、2022年、2023年、2024年が本格的な工事になると思っています。
ラグビーワールドカップ、東京オリンピック・パラリンピック、ワールドマスターズゲーム、そして、その次に大阪・関西万博となります。皆様が主役と感じていただけるような万博にしたいと思っていますので、ぜひアイデア・ご意見を賜れれば、また主体的に参画していただければ有難いと思っています。ご清聴有難うございました。

第2部　座談会

座談会では、公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会 シニアアドバイザー コシノジュンコ氏、伊藤忠商事株式会社 専務理事・一般社団法人関西経済同友会 代表幹事・２０２５年日本国際博覧会協会 副会長 理事・一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構 理事 深野 弘行氏、株式会社日本総合研究所 調査部 マクロ経済研究センター 所長 石川 智久氏、そして第１部に引き続き森 清氏にご登壇いただき、第１部の講演を踏まえご討議いただきました。

●登壇者
・コシノジュンコ氏
公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会 シニアアドバイザー
・森 清氏
公益社団法人２０２５年日本国際博覧会協会 副事務総長（理事）
・深野 弘行氏
伊藤忠商事株式会社 専務理事　一般社団法人関西経済同友会 代表幹事
２０２５年日本国際博覧会協会 副会長 理事
一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構 理事
・石川 智久氏
株式会社日本総合研究所 調査部 マクロ経済研究センター 所長
・永野 耕平氏
岸和田市長

石川氏：第２部は当機構第４部会長の石川が司会を担当いたします。座談会ですので率直かつ気軽にお話ししていただけると大変有難く思います。個人的には、大阪・関西らしい万博とはどういうものかについて本音で語っていただきたいと思っております。特に、大阪・関西万博 シニアアドバイザーのコシノ氏には世界を知るデザイナーとして、また、1970 年万博でご活躍された経験からお話ししていただけると有意義な座談会になると思います。
では早速、プロデューサーの方々への期待をお聞きしたいと思っております。まずコシノ氏、お願い致します。

コシノ氏：皆様それぞれ自分の生き方・考え方、を提案してくださっていると思いますが、まだアバウトで、まだまだ練る必要もあると思います。ですから、これからどうするかとい

うことを討論していかなければいけないと思います。それぞれのパビリオンが成立して面白

いものになるかどうか。「いのち」ということで、8 人のプロデューサーそれぞれが自分の思いがあるでしょうが、それが果たして成功するかは、少し不安に思います。なぜなら、「いのち」は広いものだと思うからです。「いのち＝生きる」、そして「生きる」ということは常に動いているということで大変神秘的ですが、「いのち」を知る、育む、守る等、それぞれの使命がパビリオンになったとき、プラスになるチームであることが大切だと思います。
興味があるのは、メディアアーティストの落合氏です。自然と人工物はある種の対極だと思うので、対極コンセプトというのをぜひ提案したいです。それは考え方ですので、どこにでも通用できると思います。1 歩引いて全体から見たらどうなっているかという全体論と 1 つを集中的にやっていくという、常に 2 つだと思いますので、小さく留まらず変化がすごく大切かと思います。「いのち＝動く」、動くということは常に毎日同じことの繰り返しではないと思うので、この 185 日間毎日違うというくらい、また行きたくなるような変化があれば面白いと思っています。

石川氏：有難うございます。毎日違う、非常にいいコンセプトをいただいたと思っております。使命をどう表現するのかが大変ということが、世界で表現をされている苦労を味わった方だと思い、大変重く聞きました。それでは、森氏宜しくお願いします。

森氏：コシノさんが万博の期間中、毎日何かが変化するというアィディアをおっしゃられました。プロデューサーの方々の中でも、リアルなパビリオンとサイバー・デジタルの世界を組み合わせて色々変化するものを出したいと、例えば、この第 2 回セミナーで石黒さんがおっしゃっておられました。コシノさんがおっしゃられたこととプロデューサーの方々が考えていることとは共通することが多いと思います。
これまでコシノさんには、色々な場で万博について意見・提言をしていただいていますし、プロデューサーの方々も色々なメディアで万博に対する思いを伝えてくださっておりまして、他のシニアアドバイザーの方々も含め、最近、いろいろな広がりが出てきたのではないかと思っております。先程コシノさんがおっしゃたように、万博開催期間中、日々何かが変わっていくでありますとか、そうしたいろいろなコンセプトが実現できるように、事務局としても頑張っていきたいと思っております。

石川氏：有難うございます。シニアアドバイザーとプロデューサーがコシノ氏も先程おっしゃられたようにプラスになる 1 つのチームになるということだと思って聞いていました。また、リアルとサイバーはまさに対極コンセプトなので、これをどうやって高めていくかという、そういった視点をいただいたと思っております。それでは、深野氏ご意見をお聞かせください。

深野氏：今回のコロナのプロセスを通じて、未来を予想することは本当に難しいと感じました。そもそもこのようなパンデミックの状態が起こるということ自体、昨年の今頃は現実の

問題としては全く捉えきれていなかったと思います。そういう未来を見通すのが難しい、そしてこのコロナ禍がきっかけとなり社会の在り方まで変えてしまうような、そういう歴史的な転換点に差し掛かっているのかもしれないという中で、今回のプロデューサーの方はそれぞれの非常に深い知識と直観力を持っておられると思いますので、ぜひそういう力をもって予言をしていただきたいと期待しております。
第 2 回セミナーに宮田氏、石黒氏に来ていただいたときに、非常に心に残っておりますお言葉として確か宮田氏だったかと思いますが「世界観を変えるような体験にできるかが勝負だ」というようなことをおっしゃられました。彼は主にデータ利活用の話を随分されていて、これを上手に使うことによって人類が革命的な進化を遂げることができるのではないかというようなお話だと理解を致しました。また石黒氏も、アバターが間に入って高齢の方や障害の方を含め、皆が常人を超える能力で様々な活動に自在に参加できる社会を実現するんだということをある意味予言されました。そういったものがこの万博のときにテーマ館を通じて垣間見えて、先の見通せない霧が少し晴れるような場になれば大変素晴らしいと思っております。

石川氏：有難うございます。確かに、未来社会を予言して欲しいというのは本当にそう思います。では次に、万博は一般的には産業の祭典と言われますが、特に日本でやる場合には、文化の祭典である面もとても強いのではと思っています。歴史が長い関西でやる以上世界を魅了する魅力的な万博にしたい、そのためには技術だけではなく文化が必須だと思うのですが、2025 年万博を文化、アート、デザインの観点からどうしていくべきかという話をお聞きしたいと思います。文化の話でございますので、ぜひコシノ氏ご意見をお願い致します。

コシノ氏：今回このコロナの体験で、日本だけでなく世界が共通していのちの尊さを分かったと思います。そういう意味で今回の「いのち輝く未来世界のデザイン」、こういうものを具体的にデザインしていくということだと思います。先程、「いのち=生きる」、「生きる＝動く」と申しました。動くということは、人間がどう活動し、それがデジタル化し、形になっていくか。デザインというのは、基本的なものをどういうふうにしていくかという基本設計でもありますが、そこにアート性がないと面白くない。やはり芸術は何だか面白いわけです。これは理論的なものでなく、子どもでも誰でも分かるのがアートかなと思います。アートには答えが無いですけれども、1 つの答えを言ってしまうと面白くないので、それぞれのパビリオンが、芸術性の高い、感性のあるものを見せていくことが、今回大きなテーマではないかと思っています。
万博はある意味で体験型、遊びの世界だと思います。この遊びの世界がどういう遊び、体験をするか。世界をこんなふうに面白くできるんだというような可能性みたいなことがデザイン、アートによってお勉強というより面白く体験できることが、アート性のある、芸術性のあるものになっていくと思います。それには、元気で楽しくという基本的なものだと思います。年齢関係なく皆が一緒になって感じるということ。大人だけの世界だけれど、子どもも、世界中の人たちがそこの場所に行って、こんな思いをしたことない、それが未来につながる。子どもたちが感動するということは未来につながると思います。未来は見えないですが、見えるような錯覚に陥るというような、そういうデジタル化もあると思います。

石川氏：有難うございます。大変面白いお話と思って聞きました。コシノ氏のデザインは面白さと上品さが両立しており非常にいいなと思うのですが、どういうふうにしたらそういうものが作れるのでしょうか。

コシノ氏：ただ無茶苦茶にやることではなく 1 歩引く。上品さは技術の素晴らしさや計算しているようでしていないような、そこがすごく難しい面ですが、品のよさというのは、私は日本の感性かと思います。長い歴史と伝統を持った日本だからこそこれだけのことができるという。上品さは技術の凄さだと思うし、バランスだと思っています。

石川氏：大変面白い話を有難うございます。深野氏いかがでしょうか。

深野氏：万博は非常にアートと関係が深いと思っています。私は 70 年万博の世代でございますので行きましたけれども、まず岡本太郎氏の印象がものすごく強烈でした。「芸術は爆発だ」というお言葉が万博というとすぐ連想で出てきます。また、東京におりましたときに毎日渋谷駅を通っていて、そこにある岡本太郎氏の大きな絵を毎日見ながら通勤していましたので、心の中にずっと岡本太郎氏が染みこんでおります。そういうことを考えると、今度の万博もぜひ、芸術は爆発ということを上手く継承して欲しい、その表れがロゴマークだと思います。あれは 70 年万博のモチーフをオマージュしたということで、今度の万博全体にぜひ、岡本太郎氏のレガシーが生きていると素晴らしいのではないかと思います。
芸術に触れているというのは、クリエーティビティーを生み出してく上で絶対に不可欠だと思っています。昨年関西経済同友会でハーバードに行ったときに、ハーバードの美術館を見せていただいたのですが、医学部の学生が見に来るそうです。人間の心が分からないと医者というのは非常に問題があるということで、人間の心の働きというのを理解するために芸術に触れようということだそうです。他にも工学部のエンジニアの卵の学生たちも来るそうで、芸術は色々な方の心を刺激するものです。
また、今回万博は「いのち」だというのは、先程コシノ氏がご指摘をされたことですけれども、体と心が対になって「いのち」なので、心の部分というのは恐らくアートに非常に関係があると思います。ですからぜひ、この日本国内では最も文化が集積している関西の地の利を生かして、上手くそういうものが万博の中に織り込まれたらと思っています。

石川氏：有難うございます。確かに、「芸術は爆発だ」ってなかなかインパクトがある言葉です。森氏、今の話を聞いてご感想、ご意見をお願いします。

森氏：私は関西に来る前、インターネットの国際的な政策調査のような仕事でヨーロッパに色々行きましたが、ヨーロッパはもう 5、6 年前から GAFA などの活動に対して色々な問題意識を持っておられました。そういうところで議論していて思いましたのは、デジタルのプラットフォームを運営する上で、勿論技術革新も大事ですが、それに加えて、倫理感をどうするか、アートをどうするか、デザインをどうするか等、文化や芸術、哲学的なところの思想が無いとプラットフォームというのは浸透していかないと思い知りました。もしかしたら今まさに、既存のプラットフォームが岐路に立っていて、新しいものが勃興していくのかもしれません。シニアアドバイザーの方々やプロデューサーの方々とも議論しておりますけども、リアルとバーチャルの融合ということを考えたときに、技術開発だけでは絶対上手くいかなくて、それこそ、そうした哲学、アート、デザインの出番ではないかと思っております。
また、先程コシノさんが、世の中を面白く、世界を面白くとおっしゃいました。それは全く私も同じ意見でございます。先程、4 月、5 月、6 月に修学旅行生やアジア含め、お子さんにいっぱい来ていただきたいと言いましたが、お子さんがどのようにアート、文化に触れて共感してもらえるかが成功の鍵かなと思っております。それがお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんに広がっていったら大成功かなと思っております。小中学校に 10 時間分の教材を作っているという話をしましたが、小学校 5 年生は、最後に万博のポスターを作ってくださいというのをタスクにしようと思っておりまして、どのような発想のポスターが出てくるか楽しみにしておるわけです。そういう形で、お子さま含めて盛り上がりを見せるのは、技術もそうですけども、デザイン、アートの力かなと思っております。

石川氏：大変重要な示唆有難うございます。哲学的なとか、文化とか、そういったものがないと万博は盛り上がらないというような話なのかなと思って聞いておりました。
万博、私自身、世の中で盛り上がってきたのは、先端技術の博覧会というよりも文化を大事にしようみたいな話が出てきて、ロゴマークが決まってから皆の関心が高まって、やはりわくわくするためには芸術や文化は大事だと思いますけれども、コシノ氏から見て芸術の力とはどのようなものなのか、また、ロゴマークを見てどういうふうに感じておられるのかもお聞きできたらと思います。

コシノ氏：私は常に対極コンセプトって言っておりますけれども、それが１つの哲学になればいいと思います。最も大切なのは、人間の体に例えると、人間は１つではなくて、右脳、左脳、２つあります。両目があってちゃんと見えるわけです。両手があって健康です。両足があって歩けるわけです。常に２つということが１つの対極コンセプトですけれども、今回のロゴマークは、形でいうと丸。人間の体も全部丸い形をしているわけですけれども、丸が全てではなくて、丸と人間が考えた合理ということで、数字の世界。この数字の世界と自然の世界って、２つで１つだと思います。それを対極コンセプトと言っているわけです。そういう意味で、このロゴが全部丸い形をしているんです。丸ということは、常に動いていて、地球も動いているし、全て自然のものは丸い形をしている。ですから、生きるということは丸い形をして、常に動いていると思います。それのみではなく、それにいかに人の考えを足していくかということだと思います。これは単純に、見た目が丸いのが沢山あって目玉みたいに見えます。先日、安藤忠雄氏は「これは賛否両論だから面白いんだよ」なんておっしゃっていました。確かに決めつけることではなく、色々な見方や意見があって、色々なことが感じられると思うので、結論はなくても、見て印象的なのは確かですね。ぱっと見たとき、「えっ？」と感じました。「えっ？」と感じてよく見ると、人間が生きている、そのまんまだと思いました。目玉に見えてちょっと気持ち悪い、だけどちょっと可愛い。赤なので、血の色と言えば少し気持ち悪いですが、生きているということだと思います。あまり説明という理論的なものではなく、一瞬見たときに、なんか常にころころと楽しそうというふうになると良いと思います。それをいかに、パビリオン等に影響していくのかがこれから考えるところかと思います。人間が考えたものはもう少し合理的で数学的ということだと思うんですけれども、何か足し算していくこともありかなと思います。

石川氏：有難うございます。今、夢洲機構の会員企業で色々万博に関わっている人間で、万博に対してどういったものを作るべきか悩んでおりますが、その答えがこの対極コンセプトという考え方かなと思い、大きな勉強になった話だと思います。
今回の万博ではもう１つ隠れたテーマがあるのではと思っていまして、それが先日、井上万博大臣とコシノ氏、安藤氏が対談されたときに出てきたコンセプトの「海の万博」という概念だと思います。夢洲という海の場所でやるという珍しい万博でもあるので、この「海の万博」ということを今から議論を深めていきたいと思っています。コシノ氏は岸和田市出身として海の万博をどう考えておられるのかと、本日は岸和田市長の永野氏もいらっしゃるので、お二方のお話を聞いて、この話を掘り下げていきたいと思っております。ではまずコシノ氏、

「海の万博」について自由に語ってください。

コシノ氏：島が万博会場になるということは、海と空に囲まれているわけです。空も海も世界につながっています。世界的な万博はやはり海と空だと思います。これは自然なことですけれども、海は目の前に和歌山があり、淡路島があり、瀬戸内海があり、それがどんどん世界につながっていくわけですから、つながりという意味では、世界観があって素晴らしい。一言で、海の万博だったという単純な分かりやすい万博になったらいいかなと思います。海は常に動いていて、常に生き物がいて、見ているだけでもずっと飽きず、面白い。この面白さというのは瞬間の変化。常に動いているというのはなんて美しく、飽きないか。そういう海のイメージが良いです。だから、海外から来るときも、船で来るのか、空から来るのか。そのような共通の何か新しいコミュニケーションもあるかと思います。

石川氏：空の万博もなかなか楽しい言葉だと思って聞いておりました。永野氏、いかがでしょうか。

永野氏：「海の万博」というテーマは素晴らしいと思います。皆様色々と万博の中身についてお話しいただいておりますけれども、地方自治体として、まず万博が大阪で行われることについて大阪の人たちがどう捉えていくのか。そしてまた、万博が来たことによって大阪がどう変わっていくかということを重視しています。そんな中で、今回「海の万博」ということを裏のテーマとして掲げていただいた。本当に我々泉州地域としては大変嬉しく思います。というのは、大阪は実は魚が沢山捕れます。大阪湾はチヌの海と言われ、魚がたくさん捕れる豊かな海で、だからこの大阪は発展したと言っても過言ではないです。そのチヌの海の中で沢山漁業が営まれ、実は大阪の漁業の 8 割は岸和田です。ですから岸和田としましては、「海の万博」とは、海の魚たち、そして、それを生業としている岸和田の漁師と考えています。
本日は岸和田の漁師かつ大阪の漁協の代表でもある岡氏と一緒に参加させていただいており、岡氏とも普段から話しているのは、万博が来たことによってよく分かれへん海外の方々が来て、よく分かれへんことが沢山起こって、それが目の前を通り過ぎて行ったということではなく、先程から何度も言われている、変化ということを皆で体験できる、そんな万博にしてもらいたいと思います。ですから、万博が終わったときに、海がもっと豊かに、綺麗になり、魚も沢山いる。そして、それが人々の心の中に刻まれて、万博が終わった後も人々が海を見て、大阪の海って万博のときから意識し始めたけど、最近綺麗になってきたなとか、そういうふうに皆で海を大事にできるような変化を皆の心の中にもたらせたらと思います。そして、変化していくこと自体を人々が楽しめるような、そんな万博にしたいと思います。

石川氏：大変力強い話、有難うございます。森氏、今のお話をお聞きいただきいかがでしょうか。

森氏：永野市長に加えて、岡さんが来ておられるので、少し岸和田の話をさせてもらいたいんですけど、2 年前誘致のときに、万博の国際機関の方々が来られました。そのとき、お昼は京都御所で弁当を召し上がられましたが、夜をどないしようということでして、夜は岸和田、泉州づくしやということで、イタリア料理店で泉州のお魚を使いまして、ワインも大阪

のものを飲んでもらいました。そうすると、大阪の食文化は、たこ焼きとかもすごいけど、こういう新鮮なものもあるんだということで、非常に盛り上がりまして、それこそ、万博誘致に非常に貢献していただいたと思っております。
また、コシノさんがおっしゃった「海の万博」ということですけれども、私は咲洲庁舎にオフィスがあるのですが、津波等のときは、夢洲が 7、8 メートルとか最も高台にあるので咲洲から夢洲に避難した方が安全だみたいなところございますが、逆を申しますと、夢洲に立ってても海は見えないという問題がございまして、何とか「海の万博」にせなあかんということで、色々会場デザインプロデューサーの藤本さんに考えていただいているわけでございます。
瀬戸内国際芸術祭も 2025 年にありますけれど、淀川から流れ、出口で瀬戸内海にばっと広がっているというあの夢洲を、水、海、川という観点からぜひ売り出したいと思っておりますので、コシノさん、永野市長、岡さん、また色々なお知恵をいただければと思います。

石川氏：有難うございます。では深野氏、宜しくお願い致します。

深野氏：海というのはこの万博をよくよく考えるとき見ると、切っては切れないものだということを皆様のお話を伺って痛感します。さっき文化の話をしましたけれども、文化の中で大阪を考えると、絶対忘れてはいけないのが、食文化だと思います。いわゆる B 級グルメも勿論立派ですけれども、同時に大阪の食文化の 1 つの流れは割烹だと思っています。関西経済同友会でも、割烹を何とか大阪発の文化として日本中、海外も含めて認知させられないだろうかと一生懸命やっています。割烹の主役は海産物であることは言うまでもないので、どう考えても海は切っても切り離せない。それから割烹は、欧米人にも比較的発音しやすいんじゃないかという感じがします。ですから、割烹という言葉が世界中に、着物等と同じように理解されるようになると素晴らしいと思っておりますが、そういった意味で、海を感じられる仕立てにどうできるのかは非常に重要なポイントだと思いますし、それから歴史を辿ると、まさにあの辺りは遣唐使が出発したエリアであり、日本に世界からの文化をもたらした地域でもあります。そのルーツは言うまでもなく海であります。そういう海をどう感じられるのかというのは、1 つ大きなテーマだと思います。

石川氏：大変興味深い話を有難うございます。海から芸術性を感じるという考えもある一方で、食を感じるということもあって、2025 年は先程森氏からありました通り、瀬戸内国際芸術祭もあるという意味では芸術という観点もありますし、食博は大体 3 年に 1 回あるので、順番的にいくと 2025 年が多分、食博にもなるということですので、実は万博と芸術と食が 2025 年に瀬戸内海に集まるという意味では、まさに海の万博がどんどん盛り上がるなということで、大変貴重なキーワードをいただいたと思っております。
コシノ氏は 70 年万博から大活躍されたということですので、この 70 年万博から我々は一体何を学ぶべきか、どういうエナジーを感じるべきかということを、せっかくですのでお聞きしたいなと思っています。また、70 年万博で活躍された方は、それを糧にどんどん大きくなっていらっしゃいます。そういう意味で、コシノ氏にとって、この 70 年万博というのはデザ

イナー人生にとってどういった影響があったのか、そういった話をお聞かせ願えればと思います。ではコシノ氏、宜しくお願い致します。

コシノ氏：70 年万博はまっさらな日本にやってきた文化だと思います。大きな経験となり、あれほど評判の良かった万博は過去にないのではないか。私は 3 つのパビリオンのユニホームをさせていただきましたが、誰と組んでおこなったかと言うと、建築家、音楽家、プロデューサーです。そこに新しいお互いの組み方があったということです。パビリオンでは、人を迎えるコンパニオン等色々必要です。また、世界の人との会話。これが初めて外国人を見たみたいな、本当に素朴なことですけれども、今から外国に行って何かするのではなく、外国から来てくれたということ。そこで子どもも皆ひとつになって世界を見たというのが万博会場でした。綾戸智恵氏はそこで子どものときに外国人と初めて英語で喋ったことでジャズをやりたくなったということで、そこから歌手になったり、何かがそれぞれの人生で始まったりしたのです。初めて外国人に会ったという素朴なことですが、今はもう当たり前になってしまってそれが通じる時代ではありません。逆に今度は外国で経験したけれどもやはり日本が 1 番、そういう発想というのもこの万博ではあって良いのではと思います。

石川氏：有難うございます。万博で色々なコスチュームをデザインして、色々な人の意見を聞いてすぐ自信になった、そんな感じなんでしょうか。

コシノ氏：やりたいことがいっぱいありました。例えば、生活産業館ですけれど、私は絶対これだと思ってコンパニオンに地下足袋のブーツみたいなものを履いてもらいたかったのですが、うちの娘にそんなもの履かせられるかとすごく怒られて大喧嘩になったんです。でも、今でもかっこいいと思うんです。初めてだから、やったことない、見たことない、その辺がすごく冒険だったと思います。だから、これからはその冒険をもっと崩して、どんどん前へ、やったことないからやるんだという、ここが非常に大切なことです。やったことないからやらないのではなくて、やったことないことを見つけることが 1 番大きなクリエイティブなことだと思います。だから、どんどんやったことないことに挑戦したいと思っています。

石川氏：有難うございます。コシノ氏から冒険と言われると本当に説得力があると思って聞いております。また、色々な建築家や音楽家とコラボが進んだというのも興味深い話だと思っています。大阪が多分これから色々なコラボが進むのかと思うんですけれど、コラボレーションの仕方、こつみたいなものを教えていただきたいと思います。

コシノ氏：私はどちらかというとファッションの同業の中で生まれているわけですが、同業の中でというのは面白くないんです。異業種が好きなんです。手を広げていろんな角度で生活の中に色々ある全く違う人たちとのコラボレーションというのが新しい物を生んでいきます。例えば、私はデザイナーで、ファッションデザイナーのファッションを取ると何をやってもデザインじゃないのということで、食のデザインなど全部がデザインなんです。だから、デザインにはこれだけの広さがあるという体験を今回もやっていかなければいけないと思うんです。だから肩書きは取ったほうが良いと思います。
食のデザインは永遠に世界中にあると思うんですけれども、特に大阪はやはり美味しそうだなって想像し、皆それで来ると思うんです。それを裏切らないように。美味しいという字は美しい味と書きます。ただ食べて美味しいではなく、目で見て食べるという高度な食べ方。見た目と中身、これも対極なんですけど、この 2 つが 1 つで本当に心から美味しいと心が伴うわけです。そういう意味で、「大阪＝美味しい」という感覚になってくれればと思います。

子どもでも誰でも分かるのが美味しいものだと思います。

石川氏：有難うございます。美味しい大阪、美味しい万博というのもあるのかなと思いながら聞いております。そして、天才デザイナーは異業種と付き合って生まれたということが分かったっていうのが、異業種の集まりである夢洲機構としても良かったと思います。
最後に皆様に本日の座談会を振り返った感想等をお聞きしたいと思います。まず森氏、宜しくお願い致します。

森氏：コシノさんから 70 年万博の話がありましたが、我々も 70 年万博の成功がめちゃくちゃプレッシャーになっているわけなんですけども、荒俣宏氏という作家が『万博とストリップ』という本を書いてらっしゃって、1890 年とかのパリやロンドン、アメリカでもやったんですけど、結構、ストリップが客寄せの主要な演目だったみたいなんですけども、別に 2025 年にストリップをやると決めたわけでは全然ない話ですけれども、その本を読んで非常に気が楽になりました。万博って何でもできるんだみたいな感じで、色々な人の意見を聞いて万博を皆様と一緒に楽しくやっていきたいなと思っております。
また、コロナ禍になり、東京一極にビジネスや色々なものが集中しているのが非常にリスクだみたいなことで、大阪や関西がこれからさらに大きく脚光を浴びていくと思います。実際にそういう動きがございます。大阪・関西は、食の中心であるだけでなく、医療や教育など優れた環境が色々ありますので、そういう面で、絶対、日本の成長には少なくとも東京に大阪・関西を加えた二極化が必要だというのは色々な方がおっしゃっているので、その実現の糧に万博が活用できれば、これほど嬉しいことはないと思っております。

石川氏：有難うございます。では深野氏、宜しくお願いします。

深野氏：シンボルカラーがあっても良いような気がしています。鉄道はどこでもラインカラーというのがあります。今回のこのシンボルマークの色は万博を非常に象徴している色やと思います。それこそ、いのちの 1 つの源泉である血液の色なのかもしれないし、それから、石川氏が書いた『大阪が日本を救う』という本がありますが、この表紙見てもこの色だらけなんです。これ、1 番大きいのはカニの絵がありますけど、このカニはまさにこの色でして、これ見ると何となく美味しそうだという感じもします。
70 年の万博のときのシンボルカラーは恐らく桜のマークのブルーでしょう。何となく青雲の志を持って日本がこれから交流していこうというのはこのときでした。愛知博は恐らく緑でしょう。今回は、まさにシンボルマークのこの色が万博のシンボルカラーなのかなと勝手に思っております。だから、もう少しこの色をそこら中に氾濫させたいし、電車もどっかの線はこれをシンボルカラーにして、そういう電車走らせたら良いと思います。

石川氏：有難うございます。シンボルカラーという非常に重要な提言をいただきました。では最後にコシノ氏、宜しくお願い致します。

コシノ氏：最終的に大阪・関西ということです。関西というのは面白いという感じがするんです。ですから、海の万博、面白い万博、美味しい万博。皆さんがこれだと思う経験になってくれたら良いと思います。美味しい万博となるとやはり大阪らしいなと。大阪らしさは本当に大切だと思います。世界に無いものは、このらしさだと思うんです。ですから、最終的に心に留める面白い万博になってくだされば と思います。そして、音楽も大切です。終わってから口ずさみ、それが世界中に広がると良いと思います。
あと、レガシーは残るものです。万博は建築も全部壊してしまう、それが良いかどうか。残

すものと残さないもの、そのジャッジをセンス良く。一番羨ましいと思うのは、パリ万博のときには、終わってグラン・パレという大きな素晴らしい建物、そこが文化の発信地で、今も最高に素晴らしいものです。そして、エッフェル塔。そのように何を残すべきか、何に残ってもらいたいのかをきちんと把握して、過去に無い万博をぜひ追及してくだされば と思います。

石川氏 : 有難うございます。コシノ氏から非常に色々なことを教えていただいたと思います。また、森氏、深野氏からも色々アイデアをいただいて、大変勉強になったと思っています。面白い万博、美味しい万博という言葉がとても大阪らしいと私は非常に響いております。そういう万博ができると世界中から喜ばれる万博になるのかなと思っております。そして、コシノ氏の幅の広さをすごく感じ、ファッションデザイナーではなくてデザイナーだと思いました。新しいものの創り方、ゼロから新しいものを創る創り方を教わったのかなと思っているということで、そういう意味で、万博だけではなく、イノベーションの起こし方まで教えていただいたのかなと思っております。2025 年にはコシノ氏の最高傑作が出てくるということで期待したいと思っております。本日は有難うございました。

閉会のご挨拶
林 俊武氏
一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構幹事会員、株式会社三井住友銀行
大阪・関西プロジェクトチーム 部長

皆様本当に有難うございました。2025 年に向かって皆で進んでいきたいと改めて感じております。私共、一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構では、現在様々な企業、自治体、学校、団体、128 法人、5 つの部会に延べ 630 名を超える会員が参加して活動しております。夢洲を起点とした様々なテーマについて、オープンイノベーションでまさに異業種が一緒になりながら討議をしております。本日は会員以外の方もいらっしゃいますので、関心のある方がおられましたら、ぜひ事務局までご連絡ください。それでは、閉会に当たりまして、一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構 事務局長の井垣より一言ご挨拶申し上げます。

井垣 貴子
一般社団法人夢洲新産業・都市創造機構　理事・事務局長
視聴者の皆様、お忙しい時間にご参加いただき有難うございます。この会議室にお集まりいただきました森副事務総長様、東京から大変お忙しいのにご参加いただきましたコシノジュンコ先生、会場をいつもご提供くださっています深野代表幹事様、東京から朝駆けつけてくださった石川様、そして、岸和田市役所から参加くださった永野市長様、岡組合長様、漁連の方々も岸和田市役所からご参加いただいて、豊かなディスカッションができたことを、心から感謝致します。人間ってなんと素晴らしいと思いながら、森副事務総長様がおっしゃった、みんなが主役だよ、みんなで未来をつくるんだよという、みんなでこの美しい気持ちを一緒にして、次の世代に美しい未来を、コシノジュンコ先生も大活躍してくださるそうですから、みんなで頑張りましょう。宜しくお願いします。有難うございました。

以上